自己性格特性概念の接近・回避に関するアクセシビリティが特性情報に対する自動的注意バイアスに及ぼす影響

林 幹也
名古屋大学大学院教育発達科学研究科

本研究は、自己性格特性概念の接近・回避に関連したアクセシビリティの高さが、その特性概念をあらわす性格特性語に対する自動的注意バイアスに及ぼす影響を検討したものである。実験1（N=27）では、性格特性語に対する目標価値判断課題を行うことによって、それぞれの性格特性概念のアクセシビリティの高さを測定し、さらに性格特性語に対する自動的注意バイアスを情動ストループテストの色命名反応時間によって測定した。その結果、比較的アクセシビリティの高い語と低い語は、中程度の語に比べて色命名反応時間が長く、仮説を支持しなかった。先行研究に照らし、この結果は、アクセシビリティが低いとみなされた語が持つ現実自己との関連性によるものであると解釈された。そこで実験2（N=24）では低アクセシビリティ語の現実自己適合度の評定を行った。以上の2つの結果によって、性格特性語に対する自動的注意バイアスは、性格特性概念のアクセシビリティだけではなく、その特性概念の現実自己との適合度によって決定されることが考察された。

キーワード：自己、自動的注意バイアス、接近-回避、アクセシビリティ、情動ストループテスト

問 題

自己に関連した情報およびセルフ・スキーマ（Markus, 1977）に適合する情報に対する処理の特徴は様々な研究で指摘されているが、その中でも処理の自動性および注意バイアスに関して扱った研究がある。Bargh（1982）は、独立性スキーマ群（自分を独立的であると見なし、かつ独立性を重要であると考える被験者群）と非スキーマ群に対して、省略に刺激を示しながらブロープ課題を行わせる実験を行った。この結果、独立性スキーマ群のみにおいて、注意側の耳に独立性形容詞が示された場合はブロープへの反応が遅延したが、非注意側の耳に示された場合はそうされなかったことが見いだされた。この結果は、自己に適合する情報は少ない処理資源で意識的処理が可能であり、その一方で意識的に注意していなくとも自己に適合する情報が示された場合は自動的に多くの処理資源が投入されるためであると解釈された。このような自動的注意バイアスはなぜ生起するのだろうか。自己関連情報に対する処理バイアスは多くの研究で指摘されるが、その原因は未だ明らかでない。

現在、情報処理バイアスのうちでも自動的注意を情動ストループテストによって検証した実験が数多く存在する。情動ストループテスト（modified emotional Stroop test; Mathews & MacLeod, 1985）ではオリジナルのストループテスト（Stroop, 1935）のように刺激語として色単語が用いられるのではなく、何らかの感情価や誘因価を持つ単語が使用される。その単語の意味が被験者にとって重要なもの
自己性格特性概念の接近・回避に関するアクセプビリティが特性情報に対する自動的注意バイアスに及ぼす影響

であるならば、単語に対する意味的処理が自動的に進行してしまい、意識的な処理である色の選択は遅延すると仮定されている。Geller & Shaver (1976) は自己に関する可能性のある語（嫌いな、強いる、失敗など）と中性語（測量、台所、頭文字など）の両者を刺激語として色名の課題を行ったところ、論を用意するなどの自己意識（Wicklund, 1975）を高める操作を行わずとも、自己に関連する可能性のある語に対する色名が遅延することを見いだしている。臨床心理学の領域においても感情障害と特定の情報に対する自動的注意バイアスとの関連性が指摘されている。例えば不安障害を持つ被験者は健常者に比べて、情動ストループテストにおいて脳波に対する色名が遅延する（Mogg & Marden, 1990; Mathews & MacLeod, 1985; 餓木, 1999). また Williams, Mathews & MacLeod (1996) は情動ストループテストを行った研究のレビューの中で、被験者は個人の感情障害に対応した意味を有する特定の単語に対する色名が遅延すると主張している。同様に感情の弱さを含むテストにおける髄の性質は、通常の身体を連想させる絵に対する色名反応時間が中性的な絵に対するそれの比べて遅延することが観われている（Elliman, Green & Wan, 1998）。

これらにおいて注目すべき点は、ある個人の自己にとって接近的もしくは回避的な誘因価を有するであろう情報が自動的な注意バイアスを示すという点である。Geller & Shaver (1976) においては、個人にとって自己関連的であるとされる「嫌いの」、「嫌い」といった刺激語は、中性語よりも強い接近的・回避的な誘因価を有していると考えられる。感情障害を持つ個人にとっては感情障害に対応した情報がその個人にとって回避的な誘因価を持っていると考えられる。また感情の弱さを含むテストにおける髄の性質は、通常の身体を連想させる絵は回避的な強い誘因価を有しているであろう。同様に注目すべきのは、従来の自己研究における実験操作では、ある特性を自己記述的であるとみなし、かつその特性を“重要である”と考えている個人がセルフ・スキーマ群として抽出される（e.g., Markus, 1977）ことである。Bargh (1982) も同様に、自己を独立的であると見なし、かつ独立性を“重要である”と考えている群を独立性スキーマ群としている。よってこの被験者群にとっては独立性が強い接近の対象であることが推測される。すなわち、セルフ・スキーマに適合する情報あるいは自己に関する可能性のある情報とは、ある個人の自己にとって強い接近もしくは回避の対象となる情報であり、これらは他の情報において自動的に注意を引きつけやすい、自覚的に自己関連情報あるいはセルフ・スキーマに適合する情報は自動的注意バイアスを有すると考えることができる。

個人にとって接近的もしくは回避の対象となる情報の示す自動的注意バイアスは、自己研究とは異なる領域で既に示唆されている。Wentura, Rothermund & Bak (2000) は性格特性を、その所有者が他者にポジティブもしくはネガティブな影響を及ぼす可能性のある特性（寛大な、同情的な、非寛容な、利己的ななど）と、その所有者にのみポジティブもしくはネガティブな影響を及ぼす可能性のある特性（精神性、勇気のある、弱い、野心のないなど）の2種に分類し情動ストループテストを行った。その結果、色名反応時間は後者よりも前者の方が有意に長かった。この結果は、他者に対してポジティブもしくはネガティブな影響を及ぼす可能性のある性格特性を持った人物は、その周囲の個人に対して、その人物に対する強い接近行動もしくは回避行動を促すため、他の情報処理システムは自動的にこれらの特性に対して多くの注意を割り当てるのであると解釈された。すなわちWentura et al. は色名反応の原因を呈示語に対して自動的に起起こする接近/回避行動傾向である可能性を示唆しているのである。

しかし、“強い接近/回避の対象であり自動的に注意を引きつける情報”とは最も一般的にはどのような情報なのか、これに関してFazio (1986) お

そこで本研究は、Fazio et al. (1986) の操作的定義を用いることによってアクセシビリティの高い特性情報と低い特性情報を個人ごとに同定し、前者が後者に比べてより強い自動的注意バイアスを示すことを情動ストループテストによって検証することにより、自己関連情報やセルフ・スキルに適合する情報が示す自動的注意バイアスの原因が、その情報と評価との連合の強さ、すなわちアクセシビリティの高さに起因する可能性を検討することを目的とする。本研究は対象となる特性概念のアクセシビリティを測定するために目標評価判断課題（林・印刷中）を設定する。この課題では被験者に対して特性語リストを呈示し、被験者は呈示語に対して“そうありたい（Approach）”と感じるか“そうありたくない（Avoidance）”と感じるか、出来るだけ早く正確に対応するキーを押す。このプロセスは、個人が記憶内において、提示された特性語と連合した“そうありたい（ありたくない）”との接近評価的概念（もしくは回避評価的概念）にアクセスする作業であると仮定する。 “そうありたい”との反応が速ければ速いほど、その特性概念近接評価的概念との連合が強く、接近評価アクセシビリティは高いとされる、“そうありたくない”との反応が速ければ速いほど、その特性概念回避評価的概念との連合が強く、回避評価アクセシビリティは高いとされる。さらに同一被験者に対し、同じ特性語リストに対する情動ストループテストを実施し色命名反応時間を測定することにより自動的注意バイアスを検証する。よって比較方法は、情動ストループテストにおける色命名反応時間を従属変数とした 2（目標評価判断課題における評価：Approach/Avoidance）×3（特性語のアクセシビリティ：High/Mid/Low）の被験者内要因計画である。2つの独立変数はいずれも被験者自身の目標評価判断課題における反応の種類および反応時間によって決定される。本実験の仮説は、被験者にとってアクセシビリティの高い特性情報は低い特性情報に比べて色命名反応時間が遅延するであろうというものである。

実験 1

目標評価判断課題によって被験者ごとに各特性の接近/回避評価アクセシビリティを高（High）・中（Mid）・低（Low）にカテゴライズし、これらの語に対して情動ストループ課題を行うことによって、アクセシビリティと自動的注意バイアスの関連を検討する。手続きの順序としては、目標評価判断課題における処理が情動ストループ試行に影響を与えることを避けるため、情動ストループ試行を先に行い、その後に目標評価判断課題を行う。

方 法

被験者 国立大学の大学生・大学院生計27名が実験に参加した。男性6名、女性21名、平均年齢は22.85歳（SD=4.19）であった。
刺激語 林（2001）において青木（1971）から抽出された144語の性格特異性（青木による大学生の望ましさ評定得点）によりポジティブ語、中性語、ネガティブ語等を5つに加え、練習試行用に同じく抽出された48語の性格特異性である。

手続き 個別実行形式である。Apple社製マイクロコンピュータおよびマイクロフォン、キーボードを用いた。色名試行ではCRT中央に1500 msの注視点が表示され、その後に性格特異性が表示され、被験者は語の意味を無視して見えるだけ速く正確に語の色をマイクロフォンで答える。語の指示から被験者がマイクロフォンで色名を答えるまでの反応時間が計測され1試行が終了する。試行間隔は1500 msであり、その間はCRT中央に注視点が表示される。性格特異性は赤、青、緑、黄色のうちのいずれかによって呈示される。画面の背景色は黒である。実験者は色名のエラーをCRTの斜め後方から記録した。本試行前に24試行の練習試行を行った。練習試行において用いられた語は本試行で用いられたものと重複しない。刺激語の呈示順及び色は被験者内でランダマイズされた。ただし同一色が連続しないように、また各色が全試行のうち同数ずつ出現するようにランダマイズを行った。色名試行後は筆記によって5分間の挿入課題（1000からランダムな3桁の数値を減する計算問題）を行い、その後目標評価判断課題を行った。この課題では色名に用いられたものと同じ色のリストがひとつずつ呈示され、被験者はそれぞれの語に対して利き手の3本の指のいずれかを用いて“そうありがたい（Approach）”と感じるか、“そうありがたい（Avoidance）”と感じるか、“どちらとも言えない（Failed）”と感じるか、出来るだけ早く正確に対応するキーを押す。試行の最初に1500 msの注視点が呈示され、その直後に特性語が黒色で呈示される。刺激語が呈示されてから被験者がキーを押すまでの判断時間が測定され、1試行が終了する。試行間隔は1500 msであり、その間は注視点が呈示される。画面の背景色は白である。刺激語の呈示順は被験者内でランダマイズされた。判断の内容とキーの対応に関しては被験者間でランダマイズされた。練習試行24試行を行った後、144試行の本試行を行った。練習試行において用いられた語は本試行で用いられたものと重複しない。以上、被験者1人あたりの実験に要する時間は約25分間であった。

結果と考察
被験者27名中、鼻炎のため色名反応が適切に行えなかった被験者1名を分析から除外した。色名反応の反応率は1.06％と非常に低かったため、分析対象としなかった。エラー反応および外れ値となる300 ms以下1500 ms以上の反応（1.23％）を除外した上で各被験者の平均反応時間を代表値とした。この手続きの後に、各被験者の中各刺激語に対する目標評価判断課題におけるApproach反応とAvoidance反応のそれぞれにおいて最も判断の速かった試行1/3を高（High）アクセシビリティ語とし、最も判断の遅かった試行1/3を低（Low）アクセシビリティ語とし、残りを中（Mid）アクセシビリティ語とした。

①語の望ましさと自動的注意バイアス まず青木（1971）の望ましさ評定得点による特性語カテゴリー間で色名反応時間に差が見られるか検討した。先行研究ではネガティブ語はポジティブ語に比べて色名反応が遅延している（Pratto & John, 1991; Wentura et al., 2000; 林, 2001）。そこで色名反応時間を対数変換したものを従属変数とし1要因分散分析を行ったところ主効果が有意であった（F(2, 50) = 5.84, p < .01）。多重比較3の結果、ポジティブ語（627 ms）< 中性語（637 ms）<ネガティブ語（640 ms）の差は5％水準で、ポジティブ語（627 ms）<ネガティブ語（640 ms）の差は1％水準で有意であった。中性語（637 ms）<ネガティブ語（640 ms）の差が有意ではないため、ネガティブ語のみが特に

3）本研究における多重比較はすべてLSD法で行われた。
自動的注意を引きつけることを示すわけではないが、先行研究を示す通り、ネガティブ語がポジティブ語よりも自動的注意を引きつけることが確認された。

2. アクセシビリティと自動的注意バイアス 次に本研究の目的であるアクセシビリティと色命名反応時間との関連について検討した。目標評価判断課題の判断頻度と反応時間の平均およびSDをTable 1に示した。エラー反応と外れ値を除いた全6セルの色命名反応時間および刺激語の望ましさ（鶴本, 1971）, 文字長, 漢字占有率の平均値とSDを算出した（Table 2）。色命名反応時間対数変換した値を従属変数とし2(評価: Approach/Avoidance)×3(アクセシビリティ: High/Mid/Low)の被験者内分散分析を行った。評価およびアクセシビリティの主効果是有意であった（F(1, 25) =6.55, p<.05; F(2, 50)=5.25, p<.01）。交互作用は有意ではなかった（F(2, 50)=0.98, n.s.）。アクセシビリティの主効果に関して多重比較を行った結果, High>MidとMid<Lowの差がいずれも1%水準で有意であった。すなわち高アクセスビリティ語は自動的注意バイアスが大きいとの仮説は支持されず, 高・低アクセスビリティ語に対する自動的注意が中アクセスビリティ語に対するそれと同様であった。

この結果に対する解釈は2つ考えられる。（1）本実験の前提通り低アクセスビリティ語は評価的感念との連携が弱いのでである。にもかかわらずその他の原因によって情報ストリーブテストにおいて自動的注意バイアスが見られる特徴がある。（2）目標評価判断課題で低アクセスビリティとされた語は比較的長い色命名反応時間を示したことから実は評価的感念との強い連合を有しているのであるが、何らかの原因によって目標評価判断課題において連鎖反応を得ることができず、低アクセシビリティ語としてカテゴライズされる。まず（1）に関して検討するために、各セルに割り振られた刺激語の望ましさを示す（鶴本, 1971）。文字長, 漢字占有率それぞれを従属変数として2(評価: Approach/Avoidance)×3(アクセスビリティ: High/Mid/Low)の被験者内分散分析を行った（Table 2）。その結果、望ましさ得点を従属変数とした場合のみ評価の主効果および交互作用が有意であった（F(1, 25) =251.06, p<.01; F(2, 50)=304.4, p<.01）。すなわちApproach語の場合は、語の望ましさが高いほど目標評価判断は速く行われるが、これに対してAvoidance語の場合は、語の望ましさが低いほど

Table 1 目標評価判断課題における判断頻度と反応時間（ms）の平均およびSD

<table>
<thead>
<tr>
<th>判断頻度</th>
<th>Approach</th>
<th>Avoidance</th>
<th>Failed</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>M</td>
<td>52</td>
<td>66</td>
<td>26</td>
</tr>
<tr>
<td>SD</td>
<td>11</td>
<td>10</td>
<td>14</td>
</tr>
</tbody>
</table>

反応時間

<table>
<thead>
<tr>
<th>反応時間</th>
<th>M</th>
<th>Avoidance</th>
<th>Failed</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>M</td>
<td>1041</td>
<td>1106</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>SD</td>
<td>267</td>
<td>272</td>
<td>-</td>
</tr>
</tbody>
</table>

1名の被験者はFailed反応の頻度が0であったため、Failed反応の平均反応時間およびSDは記載していない。

Table 2 色命名反応時間（ms）、刺激語の望ましさ得点、文字長、漢字占有率を従属変数とした2(評価)×3(アクセスビリティ)の分散分析結果

<table>
<thead>
<tr>
<th>評価</th>
<th>Approach</th>
<th>Avoidance</th>
<th>評価の主効果</th>
<th>アクセシビリティの主効果</th>
<th>交互作用</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>従属変数</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>色命名反応時間</td>
<td>高</td>
<td>中</td>
<td>低</td>
<td>高</td>
<td>中</td>
</tr>
<tr>
<td>望ましさ</td>
<td>3.24(0.34)</td>
<td>3.56(0.34)</td>
<td>3.98(0.44)</td>
<td>6.36(0.93)</td>
<td>6.08(0.65)</td>
</tr>
<tr>
<td>文字長</td>
<td>4.08(0.22)</td>
<td>4.13(0.23)</td>
<td>4.14(0.23)</td>
<td>4.05(0.21)</td>
<td>4.17(0.19)</td>
</tr>
<tr>
<td>漢字占有率</td>
<td>0.54(0.06)</td>
<td>0.54(0.05)</td>
<td>0.52(0.05)</td>
<td>0.46(0.06)</td>
<td>0.50(0.04)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

**p<.01  *p<.05  括弧内はSD.
目標評価判断が速い、一般的にネガティブ語に対する色命名反応が遅延するとの傾向があるため、Approach反応低アクセシビリティ語の望ましさが中アクセシビリティ語のそれを下回ることによって色命名反応が遅延したと解釈することは不可能ではない。だがこの原理ではApproachにおける高アクセシビリティ語は中アクセシビリティ語に比べて望ましさが高い色命名反応時間が長いことを説明できない。これはAvoidance反応においても逆に同様である、よって本実験の結果を説明可能な要因は見られなかった4）。

そこで(2)について検討する。低アクセシビリティ語の目標評価判断課題の反応時間に関して、Mueller & Grove（1991）による自己関連付け課題の反応時間が参考になると考えられる。この実験で被験者は記銘語リストに対して現実自己関連付け課題と理想自己関連付け課題の両方を行い、それぞれの反応時間が記録される。課題での判断基準は、現実自己関連付け課題の場合は記銘語が現実自己に適合するか否か、理想自己関連付け課題の場合は記銘語があらわす性格であったりかあったりかであり、この理想自己関連付け課題は本研究の目標評価判断課題と類似している。この結果、理想自己関連付け課題において、記銘語の社会的望ましさが高い場合は主に“そうありたい”と判断することになるが、その判が現実自己に適合しない場合の反応時間は適合する場合よりも遅い、また記銘語の社会的望ましさが低い場合は主に“そうありたくない”と判断することになるが、その語が現実自己に適合する場合の反応時間は適合しない場合よりも遅い。このように“そうありたい”“そうありたくない”判断においては、特性語が現実の自己にとって既達成のものであるか未達成のものであるかが反応時間と関連性を持つことが示されている。以上の現実自己の関連性を加味すれば、本実験の結果に対して以下の解釈可能性がある。すなわち遅いApproach反応を得た語は現実自己との適合度が低い未達成な特性であるために“そうありたい”との反応が遅れ、しかしながら未達成であるがゆえに強い接近的誘因値を有しており、色命名反応が遅延した。また遅いAvoidance反応を得た語は現実自己との適合度が高い既達成な特性であるために“そうありたくない”との反応が遅れ、しかしながら望ましくない特性が既達成であるがゆえに強い回避的誘因値を有しており、色命名反応が遅延したというものである。そこで以上の解釈から、接近的低アクセシビリティ語は接近的高アクセシビリティ語に比べて現実自己適合度が低く、回避的低アクセシビリティ語は回避的高アクセシビリティ語に比べて現実自己適合度が高いであろうとの新たな仮説を設定する。実験2では目標評価判断課題の後に現実自己適合度の評定を行い、この仮説を検証することによって、上述の解釈の妥当性を検討する。

実験2

目標評価判断課題の反応時間によって高・中・低アクセシビリティとされるそれぞれの語がその被験者の現実自己にどの程度適合するのか検討する。

方法

被験者 大学生・大学院生24名、男性7名、女性17名、平均年齢は22.35歳（SD=4.18）であった。これらの被験者は実験1に参加していない。

刺激語 実験1と同様。

手続き 実験1と同様の目標評価判断課題を行った。使用機材も同様である。その後同様の挿入課題を挟み、同じリストの語に対する現実自己適合度の評定を筆記で行わせた。質問は「以下...

4）本研究においては刺激語の頻度（frequency）あるいは親近性（familiarity）を統制していないが、Pratto & John（1991）によって情動式トルーブテストに用いた刺激語の頻度と色命名反応時間との相関は統計的に有意であるとし、かつその結果が得られており、この要因が本実験の結果に影響を及ぼしたと考えることはできない。
のそれぞれの性格を表す言葉は、あなたが思うあなた自身の性格にどの程度当てはまりますか？」である。評定は7件で、1点（当てはまらない）～7点（当てはまる）とした。評定項目に関しては順序をランダマイズしたリストで5種類作成し、被験者はそのうちのひとつにランダムに割り当てられた。

結果と考察
目標評価判断課題の各条件の頻度、反応時間、および各条件における現実自己適合度の平均得点を算出した（Table 3）。現実自己適合度の得点を従属変数とし2（評価：Approach/Avoidance）×3（アクセシビリティ：高/中/低）の被験者内分散分析を行った結果、評価の主効果および交互作用が有意であった（F(1, 23) = 43.07, p < .001; F(2, 46) = 7.27, p < .001）。すなわち被験者は自己にとって接近的評価を示す特性を有した語に比べて自己適合的であると評定した。また交互作用に関してで多重比較を行った結果、接近的評価高アクセシビリティ＞回避的評価中アクセシビリティの差が10%水準で有意傾向、接近的評価高アクセシビリティ＞接近的評価低アクセシビリティの差が5%水準で有意であったが、接近的評価低アクセシビリティ＞接近的評価高アクセシビリティの差は有意ではなくかった。また回避的評価高アクセシビリティ＜回避的評価中アクセシビリティの差および回避的評価高アクセシビリティ＜回避的評価低アクセシビリティの差がともに5%水準で有意であったが、回避的評価中アクセシビリティ＜回避的評価低アクセシビリティの差は有意ではなかった。被験者は目標評価判断課題において最も遅いApproach反応を行った語の現実自己適合度を最も遅いそれに比べて低く評定し、最も遅いAvoidance反応を行った語の現実自己適合度を最も遅いそれに比べて高く評定したのである。この結果はMueller & Grove (1991)と同様、未達成の接近的評価特性に対する接近的評価判断が遅れ、また既達成の回避的評価特性に対する回避的評価判断が遅れることを示している。

考察
本研究の目的は、セルフ・スキマに適合する情報や自己関連情報が自動的な注意を引きつけることの原因が、個人内の特性ごとの接近・回避に関連するアクセシビリティの高さに起因することを検証することであった。そこで従来の研究におけるセルフ・スキマや自己関連情報が他の情報に比べて個人に対して強い接近もしくは回避の対象となる情報である可能性を論じた。また同時に、現在の自動的注意バイアスに関する研究結果から個人にとって接近や回避の対象となり得る情報が自動的に注意を引きつける強い特性を持っていない可能性を論じた。その上で自動的注意活性化に関する議論を引用し、セルフ・スキマに適合する情報や自己関連情報は、その他の情報に比べ

<table>
<thead>
<tr>
<th>判断頻度</th>
<th>Approach</th>
<th>Avoidance</th>
<th>Failed</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>M</td>
<td>56</td>
<td>61</td>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>SD</td>
<td>10</td>
<td>14</td>
<td>10</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>アクセシビリティ</th>
<th>High</th>
<th>Mid</th>
<th>Low</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>M</td>
<td>665</td>
<td>836</td>
<td>1253</td>
</tr>
<tr>
<td>SD</td>
<td>149</td>
<td>209</td>
<td>388</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>反応時間</th>
<th>M</th>
<th>731</th>
<th>935</th>
<th>1341</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>SD</td>
<td>117</td>
<td>197</td>
<td>360</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>現実自己適合度</th>
<th>M</th>
<th>3.99</th>
<th>4.29</th>
<th>4.38</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>SD</td>
<td>0.82</td>
<td>0.88</td>
<td>0.77</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Table 3 実験2の目標評価判断課題の頻度、反応時間(ms)，および各条件における現実自己適合度の平均値とSD
自己性格特性概念の接近・回避に関するアクセシビリティが特性情報に対する自動的注意バイアスに及ぼす影響 117

で評価的念の通りが強い可能性について論じた。以上のことから自己内に接近と回避に関する評価的概念を仮定し、目標評価判断課題で比較的高アクセシビリティとされる語は比較的低アクセシビリティとされる語に比べて自動的に注意を引きつけるため、感情ストルーブテストにおける色名近似大になるであろうとの仮説を設定した。実験1の結果、高アクセシビリティとされた語は中アクセシビリティとされた語に比べて大きい自動的注意バイアスが見られたもの。低アクセシビリティとされた語も高アクセシビリティとされた語と同程度の自動的注意バイアスが見られた。

実験1では低アクセシビリティ語の色名反応時間の長さを説明可能な要因が見当たらず、また先行研究の結果から低アクセシビリティとされた語は目標評価判断課題において現実自己との関連性のために反応時間が遅くなったのではないかと予想した。そこで実験2では目標評価判断課題を行った後に現実自己適合度の評定を行った。その結果、接近的評価アクセシビリティが低いとされる語の現実自己適合度は接近的評価アクセシビリティが高いとされる語のそれに比べて有意に低く、また回避的評価アクセシビリティが低いとされる語の現実自己適合度は回避的評価アクセシビリティが高いとされる語のそれに比べて有意に高かった。この結果を実験1と照合すると、接近的評価を有し未達成の特性は目標評価判断におけるApproach反応が遅れるが、しかしながら既達成の特性と同程度の自動的注意バイアスを示す。また回避的評価を有し既達成の特性は目標評価判断におけるAvoidance反応が遅れるが、しかしながら未達成の特性と同程度の自動的注意バイアスを示す。ただし実験2の現実自己適合度では、接近的評価中アクセシビリティ＞接近的評価低アクセシビリティの差および回避的評価中アクセシビリティ＜回避的評価低アクセシビリティの差は有意ではなかった。よって実験1の色名反応時間の中アクセシビリティ＜低アクセシビリティの差が有意であることと完全に一致しているわけではない。このことから現時点では、自動的注意バイアスを生起させる自己関連情報を特徴は接近的評価アクセシビリティおよび回避的評価アクセシビリティの高さと、その特性が既達成であるか未達成であるかが交互作用することによって決定される可能性があると考えるとときるべきであろう。Higgins (1987)などの自己不一致理論では個人にとって理想的な特性が未達成である、すなわち自己不一致が存在することを、抑うつに関連した感情との関連が論じられている。これと符合して特性レベルでの自己不一致が自動的注意バイアスと関連しているか、あるいは人間の情報処理システムが環境内で自己的に自己不一致を検出し、その情報に対してより多くのリソースを投入する可能性も考えられる。

以上のように本研究は自己内に接近/回避に関連した評価的概念を仮定し、各特性との予めの強さの観点から検討を加えることにより、自己やセルフ・スキーマに関する情報処理の特徴を論じる際のトントロジー的説明を回避しようとしたのであるが、結果的には接近・回避に関するアクセシビリティの好みによって自動的注意バイアスを説明することはできず、現実自己との関わりの重要性が示唆されたにとどまった。よって今後は現実自己との関わりの下に特性を分類し自動的注意バイアスを検討することが必要であると考えられる。また従来セルフ・スキーマ群としてきた“ある特性が自分に対しては著しく、かつ重要であると考えている”と評定する被験者において、実際にその特性のアクセシビリティが高いかどうか検討することが必要である。これらに加えて、Wentura et al. (2000)は感情ストルーブテストにおける色名近似大の原因が呈示語に対して自動的に生起する接近/回避行動傾向にあるとしており、この問題は感情プライミング効果のメカニズムに関する議論においても論じられている (e.g., Moors & De
Houwer, 2001; Wentura, 2000; Wentura, 1999) が、これに関しても検討が必要であろう。これらによって、自己を長期記憶における評価的構念を中心とした特性のネットワークとして仮定するとともに、その特性レベルでのアクセシビリティに応じて環境情報の入力に対して能動的に行動傾向を生起する、行動に密接な認知構造とみなすことが可能になると考えられる。

引用文献
林斡也 2001 反応的認知研究における漢字仮名混じり的性格特性語を用いた情報ストレーブ課題の利用可能性に関する検討 名古屋大学大学院教育発展科学研究科紀要（心理発展科学）、48, 291-300.

鶴木恵子 1999 高不安者の脅威情報に対する処理バイアス——確認強迫の高低による比較 性格心理学研究、8, 43-54.
Williams, J.M.G., Mathews, A., & MacLeod, C. 1996
The emotional Stroop task and psychopathology.  

Psychological Bulletin, 120, 3-24.
−2002.5.29受稿, 2003.2.1受理−


A study was conducted to examine whether accessibility of self traits in terms of approach or avoidance influenced automatic attentional biases to the trait words. Experiment 1, with 27 participants, examined the relationship of trait accessibility and automatic attentional biases using emotional Stroop test. Accessibility was measured as reaction time for an evaluation task. Results revealed that high-accessibility words showed stronger attentional biases than medium ones, but low-accessibility words also showed similar attentional biases as the high. In light of past studies, this result was interpreted as indicating that words defined as low in accessibility indeed had self implications. Experiment 2, with 24 participants, examined self-descriptiveness of the traits in relation to the rater's actual self. Two experiments together suggested that automatic attentional biases to trait words were determined, not only by their accessibility, but also the self-descriptiveness of the traits in relation to the rater's actual self.

Key words: self, automatic attentional biases, approach-avoidance, accessibility, emotional Stroop test.